

基準準位のエネルギー $E_0$ ,分布密度 $N_0$ ,レーザー下準位のエネルギー $E_1$ ,分布密度 $N_1$ ,上準位のエネルギー準位 $E_2$ ,分布密度 $N_2$ とする。反転分布密度 $\Delta N \equiv N_2 - N_1$ とする。

準位  $i$  から準位  $j$  への遷移寿命を $t_{ij}$ とする。利得媒質の利得スペクトルは均一広がり（結晶性の高い媒質の利得スペクトル）とし、誘導放出断面積を $\sigma$ 、レーザー光子エネルギーを $h\nu$ ,利得媒質への集光強度を $I$ とする。また、準位  $i$  への励起率を $R_i$ とする。

ここで単位時間あたりの 変化率を示す微分方程式であるレート方程式を考える。レーザー上準位と下準位の分布密度の時間変化率 $\frac{dN_2}{dt}$ ,  $\frac{dN_1}{dt}$ は以下のレート方程式で表せる。

$$\begin{aligned}\frac{dN_2}{dt} &= R_2 - \left(\frac{1}{t_{20}} + \frac{1}{t_{21}}\right)N_2 - \frac{\sigma I}{h\nu}(N_2 - N_1) \\ \frac{dN_1}{dt} &= R_1 - \frac{1}{t_{10}}N_1 + \frac{1}{t_{21}}N_2 + \frac{\sigma I}{h\nu}(N_2 - N_1)\end{aligned}$$

また、反転分布密度 $\Delta N \equiv N_2 - N_1$ と利得係数 $\gamma$ には、 $\gamma = \sigma \Delta N$ という関係が成り立つ。

ここで上準位の自然放出寿命を $t_f$ とすれば、 $\frac{1}{t_f} = \frac{1}{t_{20}} + \frac{1}{t_{21}}$ という関係が成り立つ。

また、定常状態ならば、分布密度の時間変化はゼロであるので、 $\frac{dN_2}{dt} = \frac{dN_1}{dt} = 0$

上記の $\frac{1}{t_f} = \frac{1}{t_{20}} + \frac{1}{t_{21}}$ 、 $\frac{dN_2}{dt} = \frac{dN_1}{dt} = 0$ を用いてレート方程式を変形すると、

$$\begin{aligned}\frac{dN_2}{dt} &= R_2 - \frac{1}{t_f}N_2 - \frac{\sigma I}{h\nu}(N_2 - N_1) = 0 \\ \frac{dN_1}{dt} &= R_1 - \frac{1}{t_{10}}N_1 + \frac{1}{t_{21}}N_2 + \frac{\sigma I}{h\nu}(N_2 - N_1) = 0\end{aligned}$$

となり、 $R_2 = \left(\frac{1}{t_f} + \frac{\sigma I}{h\nu}\right)N_2 - \frac{\sigma I}{h\nu}N_1$ ,  $R_1 = -\left(\frac{1}{t_{21}} + \frac{\sigma I}{h\nu}\right)N_2 + \left(\frac{1}{t_{10}} + \frac{\sigma I}{h\nu}\right)N_1$ と変形できる。

ここで、 $A \begin{pmatrix} N_2 \\ N_1 \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} R_2 \\ R_1 \end{pmatrix}$ と表せる行列  $A$  を考えると、 $A \equiv \begin{pmatrix} \frac{1}{t_f} + \frac{\sigma I}{h\nu} & -\frac{\sigma I}{h\nu} \\ -\left(\frac{1}{t_{21}} + \frac{\sigma I}{h\nu}\right) & \frac{1}{t_{10}} + \frac{\sigma I}{h\nu} \end{pmatrix}$ となる。

$A$ の行列式 $|A|$ を計算すると、 $|A| = \frac{1}{t_f} \frac{1}{t_{10}} \left( 1 + \frac{I}{\frac{h\nu}{\sigma t_f} \left( \frac{t_{20}}{t_{10} + t_{20}} \right)} \right)$ となる。

また、利得媒質の飽和光強度 $I_s \equiv \frac{h\nu}{\sigma t_f} \left( \frac{t_{20}}{t_{10} + t_{20}} \right)$ を用いると、 $|A| = \frac{1}{t_f} \frac{1}{t_{10}} \left( 1 + \frac{I}{I_s} \right)$ と表すことが

できそして $A$ の逆行列 $A^{-1}$ を考えると、 $A^{-1} = \frac{1}{|A|} \begin{pmatrix} \frac{1}{t_{10}} + \frac{\sigma I}{h\nu} & \frac{\sigma I}{h\nu} \\ \frac{1}{t_{21}} + \frac{\sigma I}{h\nu} & \frac{1}{t_f} + \frac{\sigma I}{h\nu} \end{pmatrix}$ であり、これを使って、

$\begin{pmatrix} N_2 \\ N_1 \end{pmatrix} = A^{-1} \begin{pmatrix} R_2 \\ R_1 \end{pmatrix} = \frac{1}{|A|} \begin{pmatrix} \left( \frac{1}{t_{10}} + \frac{\sigma I}{h\nu} \right) R_2 + \frac{\sigma I}{h\nu} R_1 \\ \left( \frac{1}{t_{21}} + \frac{\sigma I}{h\nu} \right) R_2 + \left( \frac{1}{t_f} + \frac{\sigma I}{h\nu} \right) R_1 \end{pmatrix}$ となる。よって $\Delta N \equiv N_2 - N_1$ は

$$\begin{aligned} \Delta N &= \left( \left( \frac{1}{t_{10}} + \frac{\sigma I}{h\nu} \right) R_2 + \frac{\sigma I}{h\nu} R_1 - \left( \left( \frac{1}{t_{21}} + \frac{\sigma I}{h\nu} \right) R_2 + \left( \frac{1}{t_{21}} + \frac{\sigma I}{h\nu} \right) R_2 + \left( \frac{1}{t_f} + \frac{\sigma I}{h\nu} \right) R_1 \right) \\ &= \frac{1}{1 + \frac{I}{I_s}} \left( \left( 1 - \frac{t_{10}}{t_{21}} \right) R_2 t_f - R_1 t_{10} \right) \end{aligned}$$

ここで、 $\Delta N$ を作るための実効的な励起率 $R$ を $R \equiv \left( 1 - \frac{t_{10}}{t_{21}} \right) R_2 t_f - R_1 t_{10}$ と定義すると、利

得は、 $\Delta N \equiv N_2 - N_1$ を使って、 $\gamma = \sigma \Delta N = \frac{\sigma}{1 + \frac{I}{I_s}} R$ ,  $I_s \equiv \frac{h\nu}{\sigma t_f} \left( \frac{t_{20}}{t_{10} + t_{20}} \right)$ と表せる。